

「どうぞの気持ちで」

浦安市立富岡中学校 2年 西脇 茉絢

暑い夏の日、百日紅の可愛いピンクや白い花をつけた街路樹を見つけた。その素敵な風景に、眼科検診に行くのが面倒だった筈なのに心が弾む思いで私は自転車を漕いでいた。歩道には、点字ブロックが敷いてあり、自転車で通るにはガタガタして走りにくい。又、歩行者がいた場合、自転車は気を付けて走らなければ接触事故が起きかねない、やや狭い歩道となっている。前方から制服を着た男子高校生が、自転車で並走してこちらに向かって来るのが遠くに見えた。高校生側が本来走るべき左側の歩道には、点字ブロックが敷いてある。私の自転車が歩道の左側を走り、高校生達も並走を止め一列になって走れば、余裕で互いにすれ違える筈だった。しかし、その高校生達は並走したままこちらに向かって来る。二人で大きな声で楽しげに話をし、前から来る私の自転車など視界に入らないといった顔つきで、こちらに突っ込んで来る。私は何だか急に負けるもんかと、変に気持ちにスイッチが入り、自転車を漕ぐスピードを緩めることなく相手を見ていた。すると、並走の高校生達も避けるのはお前の方だろうと、言わんばかりにスピードを上げて突っ込んで来る。（危ない！）と心の中で叫んだ私の口からは、とっさに

「何！」

と声が漏れていた。普段、私は大人しい性格でクラスでは通っている。危うくぶつかりそうになった事で私の心臓はドクンドクンと波打つ様だ。そして、何だか無性に腹が立ってきた。私はきちんと避けたつもりなのに、あの高校生達は前方の私を気にも留めず、それも並走したまま直進してきた。ぶつかりそうになったにも関わらず、彼らは謝るところか私をにらみつけるように見てから

「ったくよ！」

と吐き捨てるように言って通り過ぎて行った。さっきまでの素敵な

気持ちから一変して、腹立たしい気持ちと何か消化しきれないモヤモヤとした心持ちになり、何だか悲しくさえなっていた。何で私がかんな嫌な気持ちにならなくてはならないのか。あの人達には道を譲る気持ちなど無いのだろうかとそんな事ばかり考えて、病院に着いてからも嫌な気持ちで過ごす事となった。病院の待合室というものは、どこも混み合っていて狭く感じる。その時、私の前のすれ違うには少し狭い通路を、どうぞと言わんばかりに片手を差し出し、高齢の女性がお互いの行く場所を譲り合っていた。お互いの気遣いに軽く微笑みながら通る様は、さっきまでの自分と違いすぎて、ハッと気付かされた。この人達にあって、さっきの私には無かったもの。それは「思いやり」だ。さっきまでの私を誰に責められた訳でもないのに急に、自分が恥ずかしく思えた。

今や、ニュースでは様々な事件が毎日当たり前の様に報道されている。すれ違い様に気に入らなかったという理由でナイフで刺されたり、電車内でのトラブルに発展して殺人まで犯してしまう人がいたりするニュースも、珍しくはない。いつ何時、誰が犯罪に巻き込まれるかなんて分からない世の中である様に思える。私だって、さっきのように心にゆとりが無く過ごしていたなら、いつ犯罪に巻き込まれてもおかしくはない筈だ。

私達が当たり前の様に生活している日々は様々な人々との繋がりの中で、お互いを思いやり譲り合って、その気持ちが潤滑油のように働く事で社会生活もスムーズに流れていっているのではないだろうか。私が出来なかった、相手を思いやり譲り合う心を持ってさえいたなら、相手側の心にも変化が現れる事もあるかもしれない。私は、相手側の非がある事ばかりに目がいき、自分の行動に非が無かったのかと考える事すらしていなかった。自転車同士ですれ違ったあの時、私はあの様な臨戦態勢で良かったのだろうか。お互いを思いやり考えられるのなら、私が道を譲る位の大きな気持ちでいないとならなかつたのではないか。毎日、通学路を歩いていても、狭

い歩道をどちらかが譲り合って行かなければならない状況は、この先いくらでもあり得るだろう。

誰もが安心して生活できる「犯罪や非行の無い明るい社会」は、決して一人だけでは成し得ない。社会を明るくするには、と考えるだけでも小さくはあるが波を起こすきっかけくらいにはなるのではないか。病院からの帰り道で、私は既に自分の考えを改めていたのだから。誰もが暮らしやすい社会を担う一人として私が始められる事をするんだと決めた。あの時、病院の待合室で見た優しい光景を胸に刻み、「どうぞ」の気持ちを忘れずに生きていきたい。